



WALL STREETのドレスコード

Wall Streetサーガ

Wall Streetは、どの部屋にもドレスコードがあると信じている。

スーツ。ネクタイ。磨き上げた靴。

承認された言葉。承認された野心。承認された夢。

誰も説明しないことがある。ドレスコードは、権力を見分けるために作られたのではない。

帰属を見分けるために作られたのだ。

スーツの男は部屋に告げる。「私はルールを知っている」

スーツなしで入ってくる男は、もっと危険な問いを発する。「それを書いたのは誰だ？」

たいていのキャリアは、適応によって築かれる。

言葉を覚えろ。儀式を覚えろ。序列を覚えろ。

いつ口を開くかを覚えろ。いつ黙っているかを覚えろ。

そして30年かけて、それを自由と呼べ。

だが、どんな市場もいずれ、別種の生き物に出くわす。

市場には発行できないものを、すでに持っている誰か。

アイデンティティ。

そういう人間は管理しにくい。分類しにくい。買いにくい。

組織が交渉する相手は、利害だからだ。

信念には手を焼く。

驚くべきは、Wall Streetが同調に報いることではない。

驚くべきは、同調がいかにしばしば自分を強さを取り違えるかだ。

本当の力は、人がもはや衣装を必要としなくなったときに現れる。

その瞬間、部屋が変わる。

ルールが消えたからではない。

誰かがついに、許可を求めずに入ってきたからだ。

フェルディナンド・フレーガ

BLADEFREGA

Wall Streetサーガ